

ウィッグ史観は許容不可能か

Is Whig history inadmissible?

伊勢田哲治

京都大学文学研究科

ISEDA Tetsuji

Kyoto University, Graduate School of Letters

Abstract

This paper surveys the discussions on a Whig historiography in history of science, and proposed a more contextualized treatment of the issue. Since the mid-60s, a Whig historiography, i.e. reconstructing the history as a progress toward the present, has been accused as a wrong way of writing history. However, subsequent discussions of the issue, especially by David Hull and Stephen Brush, tend to allow a certain amount of presentism, i.e. writing history from the point of view of the present. What is needed is a clarification of various different types of presentism, and I propose four of them (perspective, negative, positive and evaluative). Some authors also suggest that Whig historiography is OK for historical writings by scientists themselves. Even though such context sensitivity is reasonable, the transcontextuality of written works makes it hard to pigeonhole various contexts in the case of history-of-science writings.

本稿においては、科学史におけるいわゆるウィッグ史観（注1）について、どのようなことが問題とされてきたのかをサーベイするとともに、実際のところ何が問題なのか、本当にウィッグ史観は許容不可能なのかを考える。第1節では、この概念の導入者であるバターフィールドがどのような規定を行っていたかの検討からはじめ、科学史にこの概念がどのように導入されてきたかの跡をたどる。第2節ではウィッグ史観と現在主義にまつわるブラッシュの2本の論文とハルの論文を検討し、あらゆるタイプの現在主義が否定されているわけではないことを確認する。第3節では現在主義が問題かどうかを考えるための概念枠組みとして、4種類の現在主義（視点的、消極的、積極的、評価的）と、4つの文脈（科学史研究、一般向けの伝達、科学教育、科学者自身による著作）を区別する。暫定的な分析としてはそれぞれの文脈ごとに望ましい現在主義の範囲が異なると考えられるが、われわれの言説空間はそれほど明確にわかれていないので注意が必要である。

1. 「ウィッグ史観」概念の起源

1-1. バターフィールドによる規定

ウィッグ史観は、ハーバード・バターフィールドの『歴史のウィッグ的解釈』（1931）で導入された概念である。導入された、という点については少し注釈が必要である。というのは、バターフィールド自身はこの本の序文の冒頭で「歴史のウィッグ的解釈」という言葉を、この言葉のすでに受け入れられた意味だとわたくしと思うものにそって使う」（Butterfield 1931[1950] , p.v）と述べており、バターフィールドが導入する以前に定着していたことを匂わせているからである。しかし、少なくとも出版物においてバターフィールド以前に「ウィッグ」を比喩的な意味で使った例は見出すことができず、その後の用例もすべてバターフィールドを典拠としている。この意味で、たとえそれまでに歴史家の間で非公式に流通していたとしても、バターフィールドが歴史学の方法論上のタームとして導入したと判断して差し支えないであろう。

では、バターフィールドは「ウィッグ」をどのような意味で使っているだろうか。当然ながら、ウィッグ史観が実際のウィッグ派の歴史家が犯しがちな過ちである、という点は名前の由来からもはっきりしており、具体的には、イギリス史

上のウィッグ党やプロテスタントを現実以上に近代的な存在として描いてしまう(少なくともトーリー党やカソリックよりは近代的だという前提で描く)バイアスを指している。

しかし、より一般化された概念としてウィッグ史観というものを考えた時、具体的にどの部分までがウィッグ史観の定義的な特徴なのかは、実はバターフィールドの記述からははっきりしない。序文では「プロテスタントとウィッグ党の側から歴史を記述する傾向、成功した革命の側から記述する傾向、過去における進歩の何らかの原理を強調する傾向、現在の賛美 (glorification) か、それでもなくとも承認 (ratification) となるような物語を作る傾向」(Butterfield 1931[1950], p.v) といった書き方がなされている。しかし、現在の用法としては、プロテスタントやウィッグ党はあくまで例であって、後半が大事な特徴だということになるだろう。

しかしこの他にも「歴史のウィッグ的解釈と不可分なのは現在に言及する形で (with reference to the present) 過去を研究するということである」(Butterfield 1931[1950], 11) という言い方がなされる。これはあとでウィッグ史観とほぼ同義に使われる「現在主義」の定義ともなる言い方であり、これをバターフィールドがどの程度本質的な規定としてとらえていたかは気にかかるところである。また、バターフィールドは言う。

ウィッグ歴史家の過ちは、この複雑さを抜けるための近道を探す際の方法にある。一般的歴史家の直面する困難は、歴史を編集しながらも、歴史の意味や特定のメッセージを変えずに (without altering the meaning and the peculiar message of history) 編集をしなくてはならない、という点にある。過去の調査に関する危険は、循環的な議論をしてしまうこと、歴史が教えるものでもなく、歴史研究が発見できるものでもなく、われわれの知識の組織の仕方から導かれた教訓を読み込んでしまうという点にある。(Butterfield 1931[1950], 22).

逆に言えば、ウィッグ歴史家は「歴史の意味や特定のメッセージを変え」てしまうわけである。

「進歩史観をとる」こと、「現在を賛美する」こと、「現在に言及する形で過去

を研究する」こと、「歴史の意味やメッセージを変えてしまう」ことは、当然お互いに関連はするものの、特にお互いの含意関係もない独立の規定である。特に、現在を賛美することと現在の視点をとることの概念的な区別があまりはっきりしないまま議論が進んだことが、科学史での議論を混乱させてきたように思われる。ここでは、「ウィッグ史観」という概念がその導入の当初から多義性をはらんだものだったことを確認して次に進もう。

1-2. 科学史への「ウィッグ史観」概念の導入

スティーヴン・ブラッシュのまとめによると、科学史における「ウィッグ史観」という言葉はジョージ・ストックキング・ジュニアの1965年の論文が初出である (Brush 1995; Stocking Jr 1965)。(注2) この論文では、ウィッグ史観は「現在主義」(presentism)という概念と結び付けられている。(注3) スtockキングは、ウィッグ史観という言葉で、科学が蓄積的に進歩するということを当然の前提として歴史を描くことを指す言葉として使っている。また、オールドロイドは、ウィッグ史観に類する考え方が科学史において批判された初期の例として、アガシの1963年の著作を挙げる (Oldroyd 1980; Agassi 1963)。アガシは「帰納主義」(inductivism)、すなわち、科学は帰納的な方法論により蓄積的に進歩してきたという歴史観を批判するが、その趣旨はウィッグ史観批判とよく似ている。

当然ながら、このような概念が導入されたのは科学史そのものの変化が大きくかわっている。ブラッシュが後に指摘するように、『科学革命の構造』(1962)をはじめとしたトマス・クーンの一連の著作は、ウィッグ史観という言葉こそ当初は使っていなかったものの、過去の科学者の仕事を同時代的な基準で評価することを求めるという意味で、反ウィッグ的な精神にもとづいていた (Brush 1995, 217-218)。ストックキングもまた新しい「歴史主義」(ストックキングの論文における反ウィッグ的な科学史の呼び名)的な科学史の嚆矢としてクーンの名前を挙げている (Stocking 1965, 213)。

ウィッグ史観という言葉が1960年代末から70年代初頭にかけて科学史の業界に導入されてきた様子は、書誌的な調査によっても裏付けることができる。科学史の代表的なジャーナルであるIsis誌のバックナンバーで"Whig"を検索すると、この言葉が1960年代末から70年代にかけて、主に書評においてしばしば

用いられていることがわかる。1967年のクーン自身によるヤンマーの『量子力学の概念的発展』の書評(Kuhn 1967)や1970年のブラッシュによるトルースデルの『力学史論集』の書評(Brush 1970)などがIsis誌上で発見できたもっとも初期の用例である。これらの用例でもすでに「ウィッグ」という言葉自体は説明なく使われているので、この頃には科学史の世界ではウィッグ史観という概念が定着していたことがわかる。また、クーンはヤンマーのテーマの「選択のしかたが決して純粋にウィッグ的ではない」と論じており、ブラッシュはトルースデルについて、最近の歴史学者(modern historian of science)はトルースデルのような歴史記述を時代遅れの「ウィッグ的」ないし「実証主義的」視点だと言うかもしれない、という言い方をしている。つまり、それが間違った科学史のやり方とされている(少なくとも「最近の歴史学者」にはそう考えられている)という了解もまた共有されていたものと思われる。

1-3. 地質学史におけるウィッグ史観批判の実例

科学史においてどのようなものがウィッグ史観として批判されてきたかを知るために、地質学史から二つほど例をあげよう。オルドロイドはウィッグ史観という概念の検討のための例として、アーチボルト・ガイキーの著作を検討する(Oldroyd 1980)。ガイキーは19世紀イギリスで広く読まれた地質学の歴史書や教科書の執筆者であるが、オルドロイドはガイキーの著作がウィッグ的かつ「帰納主義的」であることを指摘する。具体的には、ハットンをはじめとするイギリスの地質学者に対するひいきが目立ち、最終的な斉一説の勝利へと向かう歴史として描いている。これは、地質学史の記述として見たとき、とうてい中立的な記述になっているとはいえない。

しかし同時に、オルドロイドはガイキーがまさに当時の科学史の書き方のスタンダードに従っていたという事も指摘する。ここでオルドロイドは大変興味深い視点を提供する。現在の視点でガイキーを批判するのは、科学史そのものの歴史に対してウィッグ史観をとっていることにならないだろうか。つまり、ウィッグ的な科学史から非ウィッグ的な科学史へという進歩の歴史として科学史の歴史を考え、その現在の視点から過去の科学史家を断罪するのは、ウィッグ的な思考法にほかならないのではないだろうか。

オールドロイドは以上のような問題意識から一つの答えを導き出す。歴史家として科学について書く際にはウィッグ史観は問題だが、科学者として科学について書く、歴史家として歴史学について書く、など、自分自身の学術分野について記述する際にはウィッグ史観は許容されるのではないか、という決着のさせかたである。つまり、科学者が科学者を評価する、あるいは歴史家が歴史家を評価する際には、その学問共同体の内部の規範で評価するのは自然であり、「よい研究者」としての徳を身につけていることの証だともいえる、というわけである。この考え方でいえば、もともと地質学者であるガイキーが地質学についてウィッグ的であったり、科学史家が歴史学そのものについてウィッグ的であったりすることには（同時代的にも、現代の視点から見ても）問題はない。

もうひとつ取り上げたいのは、クロード・アレグレの著書『地球の振る舞い』についてのD.J. リーヴソンの論述である (Leveson 1991; Allegre 1988)。リーヴソンはプレート・テクトニクス革命の歴史を記述したアレグレの著書がウィッグ的であることを指摘する。アレグレもまた歴史家ではなく地質学者として歴史記述を行なっている。

リーヴソンの批判のポイントは、基本的には、アレグレの論述が、大陸移動説が最終的に勝利したということを踏まえて、そこに向かう進歩の歴史としてウェゲナー以来の地質学史を描いているということである。そのため、大陸移動説に反対する立場に立った地質学者たちは基本的に不合理な存在として描かれてしまっている。たとえば、アレグレは、1926年のAAPGシンポジウムでのウェゲナー説の否定、50年代以降の地質学者がなかなか大陸移動を認めなかったこと、ヴァイン＝マチューズ＝モーレー仮説を提示したローレンス・モーレーの論文が査読でリジェクトされたこと（注4）などを批判している。しかし、これらのすべての事例において、批判されている側の判断にもそれぞれ一定の理があることをリーヴソンは指摘するのである。

ただし、リーヴソンは、アレグレの著作を科学史としては批判するものの、アレグレ本人に対して批判を行うわけではない。リーヴソンはアレグレがプレート・テクトニクス革命後に成立した全球的地質学 (global geology) を非常に愛していることと、大文字の自然 (Nature) の存在を受け入れていることがこれほどウィッグ的な記述をする原因になったと分析し、科学者としてはそうしたコミットメントはけっして悪いことではない、と判断する。

オルドロイドとリーヴソンは、対象とする時代や地質学上のエピソードは違うものの、非常によく似た判断を下していることがわかる。最終的に勝利した（とその時点で思われていた）仮説（斉一説やプレート・テクトニクス）の視点から、対抗仮説の歴史上の支持者たちを一方向的に批判するやり方は、たしかに歴史学の記述としては問題がある。しかし、実際に研究にコミットメントを持つ科学者としては、歴史記述においても中立的でないのがむしろ当然である。つまり、二人はともに、ウィッグ史観批判が歴史家として歴史記述をするという文脈に限られるという結論に達しているのである。

2. ウィッグ史観の問題性をめぐる論争

それでは、歴史家（歴史家であろうとする元科学者も含め）が科学史研究を行う上ではウィッグ主義は必ず避けなくてはならないのだろうか。実はこの点についても論争がある。以下、この論争に重要な貢献を行なっているとおもわれる3つの論文、すなわちブラッシュの1970年代のウィッグ史観批判論文、デヴィッド・ハルによる「現在主義」の擁護、ハルらの指摘をふまえた1990年代のブラッシュの論文を順に見ていく。

2-1. 1974年のブラッシュ

ブラッシュは1974年の論文「科学史は18禁 (rated X) にされるべきか」の中で、科学教育における歴史学の使用にまつわる問題を指摘している。この論文はScience誌という一般の科学者が読むトップの学術誌に掲載されたこともあり、科学史におけるウィッグ史観という概念を広める上で大きな役割を果たしたと考えられる。

科学教育では「仮説は受容される前にテストされなくてはならない」「実験結果は追試可能な形で公表されなくてはならない」「確立したドグマを疑え」などのことが教えられる。しかし科学史を実際に見ていくとそれにあわないエピソードも多い。とりわけ近年の科学史は科学の主観的側面を扱う。そこで、科学教育で科学史は使わない方がいいのだろうか、とブラッシュは問うわけである。

この論文では、科学史におけるウィッグ史観は科学教師が陥りがちな立場として言及され、「あらゆる科学者を近代的な理論の確立に寄与した傾向で判断す

る傾向を持つような科学の進歩の説明」(Brush 1974, 1169)と定義されている。ウィッグ史観は、また、「過去を現在の考え方や価値を使って判断し、昔の科学者が仕事をしていた問題の文脈や前提となる考え方を完全な形で理解しようとはしない」態度のことだとされる (ibid.)。ウィッグ的な科学教師からは、現在の理論に近づく方に進まなかった科学者は「客観的に振舞ってない」「真の科学的方法を受け入れていない」とみなされる (1170)。実際のこのタイプの歴史は科学教育の目的にもあっている。

しかし近年の科学史の傾向はウィッグ史観を否定する方向にある、とブラッシュは指摘する (Brush 1974, 1170)。科学を哲学的・文化的運動と結びつけるのが最近の傾向であるが、それはウィッグ史観を否定する方向にはたらく。このような状況を見るかぎり、「自分の学生に対して、中立的な事実の発見者としての科学者という伝統的な役割を教え込みたければ、科学教師は現在の科学史が準備するような歴史的な資料は使うべきではない」とブラッシュは皮肉な結論を出す (ibid.)。それどころか、「フィクション化された歴史」(fictionalized history)を教えた方がいいのではないか、という示唆までする (ibid.)。ただし、それでもなお科学史を科学教育で教えることに意味があるという議論は可能だともブラッシュは言う (1171)。たとえば、ウィッグ主義的に現在を不可避なものとして教えることはドグマ主義につながりかねないので、むしろ正しい歴史を教えた方がいい、というカードウェルの意見もある。また、科学史を知ること、科学への近年の反感をどう乗り切るかのヒントも見えるかもしれないし、感情のない冷たい科学者という一般のイメージを崩すことはできるかもしれない、ともブラッシュは示唆する (ibid.)。

この論文は、表面上は、科学教育者に対して、ウィッグ的でありたいなら科学史と距離をおくべきだとアドバイスしている。しかしそうした科学教育に対する皮肉な物言いからするなら、むしろ裏のメッセージとしては、「フィクション化された歴史」を教えるのをえないような現在の科学教育のあり方の方が揶揄されていると読むべきだろう。そうした裏のメッセージを読み込むかどうかは別として、科学史家に限っていえば、この論文は科学史家がウィッグ史観を批判することをおある意味当然のこととしてとらえている。おそらくはこの時期の科学史家たちの態度を代弁するものでもあっただろう。

2-2. ハルの現在主義擁護

ハルは、ブラッシュのようなウィッグ史観批判に対抗し、ある種の現在主義 (presentism) を擁護する (Hull 1979). ハルが「現在主義」という言葉でウィッグ史観と呼ばれてきたものを指そうと意図しているのは、現在主義の定義として、すでに引用したバターフィールドの「現在に対する承認ないし賛美のための物語をつくること」やブラッシュの「あらゆる科学者を近代的な理論の確立に寄与した傾向で判断する傾向を持つような科学の進歩の説明」といった箇所が引用されていることから明らかである (Hull 1979, 2-3). ただし、ハルが擁護する実際の例はこの定義にあわないものが多いのは以下の議論で明らかになっていく。

ハルは現在主義の3つのパターンを区別する (Hull 1979, 4). 第一は現在の言葉の意味を過去に読み込むパターン、第二は現在の推論の原理を過去に読み込むパターン、第三は現在の科学知識を過去に読み込むパターンである。そして、この3つすべてが、過去を研究するために、また研究の成果を伝えるために必要である、とハルは主張する。

まず、意味についての現在主義批判の根拠として、意味の相対性の概念が検討される。これは、言葉の意味が時代や文脈によって変わるという現象である。当然のことながら、言葉の意味が変わるということに自覚的でないと、過去の文章を読んで当時の文脈に身をおいているつもりが、現在の意味を気づかずに持ち込んでいるということがありうる。これはアナクロニズムであり、避けるべきである。しかし、現在の言葉の用法を完全に忘れることはできないのだから、逆に現在の科学についてよく知ることで、どこにバイアスがかかりやすいか明確にするという方法もあるはずである。また、伝える際にも、過去の言葉を現在の言葉の中で一番意味が近いものに置き換えないと誤解が生じる。ここでも現在の言葉の意味について知ることが大事である。つまり、現在の言葉の意味についてよく知った上で歴史上の事例を見ることは、決して否定的な面ばかりではないのである。

次にハルは、推論についての現在主義批判の根拠である推論の相対性について考える。科学史家は推論の研究の際に現在の推論のあり方を忘れるべきだろうか。ここで、研究対象の時代の推論の原理が現在と違っていたとして、歴史家は自分自身の研究にはどの推論の原理に従うべきだろうか、と考える。当然現在である。したがって現在の推論を全面的に忘れるべきだとは言えない。また、ハル

は、なぜ過去の科学者の方法論的な過ちを指摘してはいけないのか、と問う。相互批判は科学の基本ではなかったのか。これについては、ハルは、過去の科学者は批判しても改善の可能性はないから批判しても意味がない、という回答を想定する。しかし、明らかなミス指摘してはいけないとまで言うのは行き過ぎではないだろうか。

最後に、真理についての現在主義批判の根拠となる、真理の相対性をハルは考察する。現在の科学知識を過去の科学者たちが知っていたかのように歴史を解釈したり、今我々が知っていることを知らないからといって過去の科学者を非難したりするのは確かに現在主義の悪い例であり、回避されるべきである。しかし、真理が相対的だというのが行き過ぎると、過去には地球が平らだったと認めることにもなりかねない。科学史家はそんな極端な相対主義を採用すべきなのだろうか。また、過去の科学者がどこで間違ったかの分析からも多くを学ぶことができるが、そのためには正解を知らなくてはならない。「過去の再構成には現在の知識が必要で、歴史家はそれ以外のやり方で仕事はできない (they could not do otherwise)」(Hull 1979, 13) のである。もう一つ、過去の科学者が非科学的でなかった、ということを現代の読者に伝えるというのは現在主義批判をする側の動機の一つだと思われるが、そうした再評価のためにも現在の科学知識は必要である。というのも、現在の読者に対してどこに力点を説明すべきか考えるためには、現在の読者がどういう科学知識を持っているはずかということをまず知らないといけないからである。

結論として、ハルは、現在主義に対する警告には意味があるが、警告を乱用してはならない、という。現在の言葉の意味や推論の原理や科学知識を歴史家は使わないわけにはいかない。そしてそれは科学史研究の成果を一般人に伝達する際にも必要なのである。

議論の細部を見れば分かる通り、ハルが現在主義を擁護すると言っても、ガイキーやアレグレのような一方的な歴史記述を擁護しているわけではない。むしろ、「現在に言及する形で過去を研究する」という、ハルが引用しているのと別の箇所におけるバターフィールドの記述などをもとにして現在主義を考えたときに、その極端な拒絶（現在の言葉の意味や知識を取り入れることすら否定するような立場）がかえって正常な科学史研究を阻害する、と考えているようである。ただ、ハルはアンフェアにならない範囲で過去の科学者の過ちを指摘することは望まし

いと考えているようであり、この点についてはウィッグ主義の批判者たちと意見が食い違う可能性がある。

このように、批判する側とされる側の想定する「ウィッグ史観」や「現在主義」の意味内容の一致と食い違いの度合いが気になるところではあるが、ウィッグ史観の批判においてはまず何を批判しているかはっきりさせる必要があることを明らかにした点ではハルの議論は高く評価されるべきであろう。

2-3. 1995 年のブラッシュ

ブラッシュは 1974 年の論文からおおよそ 20 年を経て、再びウィッグ史観の問題を正面から取り上げる論文「歴史家としての科学者」を執筆している (Brush 1995)。この論文はハルを始めとしてその後ウィッグ史観について書かれたさまざまな論文をふまえて執筆されており、ある意味ではウィッグ史観をめぐって科学史において行われてきた議論の集大成という観がある。(注 5)

この論文は、全体としては「科学者は科学史を書くべきか」「科学者以外のものが科学史を書くべきか」という対になった問いをとりあげている。興味深いのは、この両方の問いについて否定的な答えが存在するということである。ウィッグ史観についての議論は前者への否定的な答えにあたる。この論文の用語法としては、「歴史のウィッグ解釈」や「現在主義」に反対する立場は「文脈主義」(contextualism) と呼ばれる。

ブラッシュは反現在主義の二つの困難を指摘する (Brush 1995, 219)。まず、完全に非現在主義的な歴史を記述することは不可能である。そして、仮にそういう記述ができたとしてもそれは理想的な歴史記述とは程遠い。

ブラッシュは「ウィッグ史観」という名前ですくなくくりにながれがちな立場を二つに区別する。第一が現在志向 (present-mindedness) ないし現在主義であり、科学史的な記述を行う際に現在の視点から「問い」をたてるという立場である。もう一つがウィッグ史観 (whiggism) で、現在の視点から「答え」を出す立場である。

文脈主義の側も二つに分けられる。一つはプリッグ史観 (priggism) であり、歴史家は排他的に文脈的 (exclusively contextual) でなくてはならないという立場である。(注 6)そして、そこまで排他的でない立場が穏健な文脈主義と呼ばれる。

ブラッシュがまず主張するのは、ウィッグ史観や現在主義を完全に排することは極めて困難だということである。ブラッシュは前出のリーヴソンの論文をやり玉に挙げる。アレグレをウィッグ的だと批判するリーヴソンであるが、彼自身の議論においても、ウェゲナーの批判者たちが1926年に使った論拠は現在でも妥当とみなされている、といってアレグレを批判している。これは、過去の科学者の判断の合理性を現在の科学者の判断についての知識を利用して判定しているわけだから、ある種のウィッグ主義だと言えなくはない。ウィッグ史観批判をテーマとした論文ですらそんなことが起きるわけであるから、現在主義も拒絶するブリッグ主義は不可能なことを要求していると考えざるをえない。

ブラッシュの第二の論点として、現在主義を排除することが本当に望ましいかどうかもある。たとえば、過去の科学における女性、マイノリティ、「普通の人々」(common people)の位置は近年の流行のテーマだが、文脈主義的研究では見逃されてきた (Brush 1995, 222)。こうしたマイノリティの視点は同時代的には無視されていたわけであるから、文脈主義者がそうした問題設定をできないのは自然である。しかし本当にそんな形で手をしばることが望ましいと言えるのだろうか。また、学生や公衆にとって役に立つ「概観」(abridgement)を作るという仕事も文脈主義ではできない (223)。バターフィールドはそうした概観こそまさに過去のできごとの意味やメッセージを変えてしまうと批判していたわけであるが、そのバターフィールド自身、科学革命についての著作では非常に有用な概観を行なっているとブラッシュは指摘する (219; 223; cf. Butterfield 1949)。

以上のような理由から、ブラッシュはブリッグ主義は否定するが、文脈主義を全否定しているわけではない。ブラッシュは、文脈主義が歴史研究を独占するべきだという主張に反対しているのである (Brush 1995, 223)。

全体の論調として、ブラッシュは74年の論文では歴史家の研究そのものは反ウィッグ的であることを当然の前提としたが、95年には歴史家の仕事のイメージ自体が大きく変わっていることが分かる。

3. ウィッグ史観について考えるための概念枠組みの整理

3-1. 共通の主張

以上で概観してきた科学史におけるウィッグ史観をめぐるさまざまな主張には、いくつかの共通点がある。まずそれを確認しよう。

まず、ウィッグ史観にもっとも好意的な論者でさえ、ある種のウィッグ史観は科学史研究として明確に問題があるということは否定していない。たとえば過去の科学者が現在の知識を持っていたかのようなアナクロニズムや現在の定説と違う立場の科学者への不当な評価、現在の賛美のための歴史などを支持している者は誰もいない。ただし、科学者自身による書き物や科学教育においてはそうした歴史でも有用であるという可能性も指摘されている。

逆に、ここで考察した中で見る限りは、科学史研究におけるウィッグ史観にもっとも批判的な論者でも、研究の「問い」が現在の観点から立てられていることまで否定する意見はない。実際、マイノリティ研究などの意義を否定することは非常に難しいだろう。実際のところ、そもそもバタフィールドが問いの立て方まで含めてウィッグ史観という概念を考えていたかどうかはよく分からない。過去のできごとの意味やメッセージを変えてはならない、というのを厳密に考えるなら、問いの立て方を変えることで同じできごとの意味合いも変わってくるだろうから、批判されているタイプのウィッグ史観の一種ということになる。しかし、ブラッシュも指摘するように、バタフィールド自身の研究が現代的な問題意識を重視するものとなっており、少なくとも実際の研究実践においてはこの意味での現在主義を否定するものではなかったと考えられる。

3-2. 現在主義のさらなる区別

この論争をめぐる諸論文を見比べて気づくのは「ウィッグ主義」や「現在主義」という言葉がそれぞれ異なった意味で使われているのにそのことに対する注意喚起がなかったり、ハルの論文のように現在主義の定義と実際に擁護している「現在主義」がずれていたりといった、用語上の混乱がずっと解消されていないということである。そのため、ウィッグ史観を批判する側は、もっぱら「現在を賛美する」こと、つまり「現在がよい」という価値判断を前提に歴史を記述することの問題点を指摘しているのに、ウィッグ史観を擁護する側はもっぱら「現在の視点をとる」こと、つまり、マイノリティの視点といった同時代的には存在しなかった問題意識やあとでわかった情報を利用しながら研究を行うことを擁護する、と

いうちぐはぐな論争になっている（そしてそうした多義性はバターフィールド自身の記述の曖昧さにも一因があるように思われるという点も指摘した）。

ブラッシュの1995年の議論は概念的にかなり精緻化されているとはいえ、まだ現在主義という概念がとりうる様々な意味をきちんとすくい取っているとはいえない。今後ウィッグ史観や現在主義についての議論を深めて行く上では、もう少し細かい区別が必要になってくるだろう。本稿では以下の四つのタイプの現在主義を区別したい（そして、「ウィッグ史観」という言葉を使い続けるなら、その意味は(c)に限定することを提案したい）。

(a) 視点的現在主義：現在の理論や概念、方法論の知識を使い、その視点から問いを立てて、歴史上の理論、概念、方法論を記述する立場

(b) 消極的現在主義：現在の理論につながらないものには単に「言及しない」という立場

(c) 積極的現在主義（狭い意味でのウィッグ史観）：過去の理論、概念、方法論から現在の理論、概念、方法論へと直線的な進歩でつながっている歴史となるようにさまざまな情報を再構成する立場

(d) 評価的現在主義：現在の理論につながるものは「合理的」「客観的」と肯定的に評価し、つながらないものは「非合理的」「非客観的」として否定的に評価するという立場

このうち、(a)はハルが擁護しているバージョンであり、1995年のブラッシュ論文でいう現在主義はこれに分類できる。（ブラッシュは「問い」に限定して話しているので、細かく分けるなら(a)の中にもハルのバージョンとブラッシュのバージョンがある、というような話になるであろうが、本論文の範囲でそこまで細かくすることはなからう。）1974年の方の論文のウィッグ史観の定義を素直に読むなら(b)と解釈できる。ハルが批判しているのはおそらく(c)であり、ブラッシュの1995年の方の論文でいうウィッグ史観がこれにあたる（「ウィッグ史観」の狭い定義として(c)を採用する理由も基本的にはこれである）。バターフィールドの規定のいくつかもこれに近い。ガイキーやアレグレの歴史記述は（オルドロイドやリーヴソンの分析を信用するなら）(d)の現在主義にあたる。1974年のブラッシュ論文で実際に批判的に触れられているのもこの種の現在主義である

(つまり定義と事例にずれがあるように見える)。

ハルやブラッシュの分析においては (b) から (d) のあたりはあまり区別されていない。しかし、現在主義はどこまで認められるべきかという問いを考える上では、これらの区別が重要になる場面もあるだろう。

では、これらの現在主義のうち、許容されるのはどれだろうか。次節で見るようにこの問いは文脈を限定しないと意味をなさないが、とりあえず通常の歴史家による歴史記述に話を限ろう。ハルやブラッシュが説得力を持って論じたのは、(a) が歴史研究の重要な一部を占めており、それを排除する理由は特にないということだった。これに対して、(c) が科学史という研究領域における学問的研究の(現在の)規範に違反することもここでとりあげた論者らの間にほとんど異論はない。異論がないということはもちろん正当であるということの意味はしない。とりわけ、歴史記述が何らかの意味で客観的でありうるということを否定する立場からは、(c) を特に非難するいわれはない、といった反応はありうる。しかしこれは本稿では扱いきれない大問題であり、ここでは問題の存在を指摘するに留める。

(b) については、これはブラッシュの 1974 年の定義がそのように読めるというだけで、これの是非について直接の議論はない。しかし、(b) の手法は、うまく適用すれば、積極的に科学史を「進歩」の型にはめることなく、しかも科学が進歩しているように見せることができるだろう。これは、「捏造や歪曲をせずに読者をミスリードすることはどこまで許されるか」という、研究者倫理の大きな問題ともかかわる問題であるが、研究者倫理全般の議論においてもまだそこまで議論が深まっているとはいえないところである。

(d) については意見が分かれる。そもそも歴史家が対象について価値判断を下すこと自体を問題視する場合、(d) は問題であるが、ウィッグ的だから問題だというわけではないだろう。もしも偏った価値判断を下すのが問題だというなら、歴史学そのものの規範の中にどのような価値判断を下すべきかについての規範も含まれている必要があるが、はたしてそうした規範があるかどうかはあやしい。他方、記述そのものが中立的であった場合、歴史学として最低限の基準は満たしているという考え方もありうるだろう。もちろん、偏った価値判断は通常は偏った記述にもとづいて下される(つまり (d) は通常は (c) を伴う) ので、その場合には (d) が単独で批判されるわけではない。つまり、歴史研究としての (d) を単

独でウィッグ史観として批判するのは実は意外に難しいようにおもえる。

3-3. 科学史記述の文脈と現在主義

もう一つ、本稿でとりあげた諸論考から見えてくるのは、現在主義やウィッグ史観がどのような場面で登場するかで、その問題性についての判断も違ってくるということである。少なくとも以下の文脈が区別できる。

- (ア) 科学史の学問的研究の文脈
- (イ) 科学史の成果を一般に伝達する文脈
- (ウ) 科学教育の文脈
- (エ) 科学者が自分の分野の過去を振り返る文脈

本論考の目的は現在主義やウィッグ史観をめぐる問題について答えを出すことではないが、それぞれの文脈についてどのようなことが考察の対象になるか、簡単に概観しておこう。こうして分けた場合、前節での検討は実は(ア)の文脈における現在主義の是非についての検討であったことが分かる。したがって、あとの3つの文脈について考える。

まず(イ)の文脈であるが、伝達は何を目的とするのかが判断を左右するだろう。一つの目標としては、できるだけ正確に非専門家に研究成果を伝える、ということが考えられる。(注7)この場合、ハルの議論を踏まえるなら、(a)はむしろ伝え方の戦略を考える上で不可欠だということになる。また、非専門家の方が専門家よりもミスリードされやすいと考えるなら、(b)のような消極的な現在主義に対しても(c)と同じような注意が必要だということになるだろう。他方、非専門家への伝達の目的を、彼らが現在利用できるような教訓を得ることだと考えるなら、そもそも現在主義を心配する必要はないかもしれない。

(ウ)の科学教育については、もちろん研究者養成教育と一般教育は別に考える必要があるが、一般向け教育に特有の部分は(イ)と同様の文脈だと考えられるのでここでは研究者養成教育を想定して考える。科学教育の場面で科学史が使われることは多く、しかもブラッシュの1974年の論文が指摘するように科学教育の場面で語られる歴史はウィッグ的である((c)や(d)の意味まで含めて)

ことが多い。しかし、研究者養成教育の目的が有能な研究者を育てることであれば、その目的に最も適した語られ方がなされる必要があるだろう。ある理論がどのように成立してきたかを知ることによってその理論への理解が深まるというような場合、実際の歴史よりもその合理的再構成の方が教育目的を達することは十分あるだろう。また、科学者として正しい規範を身につけてほしい、という場合、過去の科学者についての物語にはロールモデルとなるという機能も期待されるだろう。以上のことを考えるなら、限られた時間内に最適な教育効果を挙げるためには、(c) や (d) のような語り方も必要になるかもしれない。ただしもちろん、バイアスのかかった歴史を教えることが本当に学生の科学への理解を深めることになるのかについても慎重に考える必要がある。(注8) この問題は個別の具体例に即して考えていく必要があろう。

最後に、(エ)の科学者自身による振り返りの場合はどうだろう。科学者が歴史を語る場合、そもそも対象となる論争のどれかの立場に加担していることが多い。つまり、科学者はそもそも中立な観察者ではなく歴史の参加者である。その立場からのまとめが (a) から (d) のすべての意味で現在主義的ないしウィッグ的であったり「トーリー的」であったり（つまり論争に負けた側の科学者による歴史記述が逆の意味で一方的になったり）するのは自然である。(注9) だとすれば、それは科学史の研究ではなく研究されるべき歴史の一部ととらえるべきではないか。科学者によるウィッグ史観に許容的なオールドロイドやリーヴソンの判断はそうした点を考慮したものであろう。

このように、それぞれの文脈に特化して考えたとき、現在主義は決して全否定されるとは考えにくいし、場合によってはウィッグ史観も目的にかなっている場合がある。

3-4. 文脈の切り分けは可能か

前節の考察は、文脈によってどの程度まで現在主義が認められるかを考察したものであったが、ここで当然疑問となるのは、果たして科学史の記述がそのような文脈への切り分けを許すようなものかどうかということである。

少し考えればわかるように、一つの科学史の記述が (ア) から (エ) のどれか一つの文脈に限定して存在するという保証はない。(ア)の文脈で書かれた学

術論文でも一般の人が読むことはあるだろうし、科学教育の教材として使われるかもしれない。また、科学者の書いた科学史の本は（エ）の文脈にとどまらず、広く読まれることで（イ）や（ウ）の文脈にある著作として認知されることはあるだろう。一般に、著作という形で発表されたものは消費のされ方を特定の文脈に限定することが難しい。著作の持つこの性格を「著作の文脈横断性」(transcontextuality of written works)と呼ぶことにしよう。

文脈ごとで求められる記述の内容に大きな違いがなければ文脈横断性は問題ではないが、前節で検討したのはまさにそうした違いが存在するという事実だった。とりわけ、（イ）の文脈と（ウ）の文脈は、非常に近い文脈であるにもかかわらずベクトルが逆に向かう。社会全般における科学史リテラシーを高めること（できるかぎり (b)(c)(d) をさけることが求められる）とよい研究者の養成（場合によって (b)(c)(d) がかえって求められる）が両立しないかもしれないわけである。

これに対し、（ウ）と（エ）はどちらもウィッグ史観が否定されず、文脈横断性は問題ではないようにも見える。しかし、細かく考えるなら、科学者の一方的な記述が本当に科学教育の場面で求められている教育効果を持つかどうかは保証の限りではない（たとえばその科学者の属するグループの規範はあまりよいロールモデルではないかもしれない）。つまり、ベクトルの向きが近くても文脈横断性にまつわる問題は生じる。

これはもはや科学史におけるウィッグ史観の是非というローカルな問題を超えて、アカデミズムと社会と教育の関係という大きな問題に踏み込んでしまっている。当然ながら本稿で何らかの解決を提示するような性格の問題ではないわけだが、ウィッグ史観の何が問題かを体系的に論じていく上では、文脈の違いへの感受性とともなう文脈横断性への感受性も必要であるということ是指摘しておく必要があるだろう。すぐに思いつく提案としては、著作という形で発表されるものについては、文脈を超えて参照されてもあまり不適切とならないような配慮が必要かもしれない。視点的現在主義はどの文脈においても否定されないのので気にする必要はないとして、たとえばミスリードされやすい読者が読むことが想定される場合には消極的現在主義や積極的現在主義についての注意喚起を文中に入れる、自分野の歴史を執筆する科学者に対しては現在主義の取り扱いについて論争があることを科学史の研究者ができるだけ伝え、自分の体験をある程度客観視するよ

うな視点を身につけてもらう、といった対処が考えられよう（リーヴソンの書評はまさにそうした意図で書かれたものと思われる）。

4. 結語

本稿では、科学史におけるウィッグ史観や現在主義について論じるいくつかの論文を検討し、ウィッグ史観は本当に問題なのか、という問題について手がかりをえようとしてきた。そうした検討から得られた示唆をもう一度確認しておこう。

ブラッシュの1995年の論文が論じるように、ある種の現在主義（視点的現在主義）については、どのような文脈においても特に否定する理由はないと考えられる。科学の本来の姿を明らかにするというのが科学史の理想であることには異論はないと思われるが、現在の視点から歴史を記述することはそれとは対立しない。

他方、科学教育や科学者による振り返りという文脈で考えると評価的な現在主義すら許容されるように見える。しかしながら、著作の文脈横断性を考えると、社会における科学史リテラシーを高めることとの両立可能性について慎重な考慮は必要になる。（注10）

注

- (1) 英語でウィッグ史観にあたる表現は、whig history, whig historiography, whiggism, whiggery など多様である。whiggism や whiggery には否定的なニュアンスが強いとおもわれるが、指示対象については大差はないと考えられるため、本稿では特に区別せず、すべてに「ウィッグ史観」という訳語をあてている。また、whig の日本語表記としては「ホイッグ」の方が一般的であるが、ここでは原音に近い表記を採用した。
- (2) わたし自身も文献サーチを行ったが、科学史においてこれより古い用例を発見することはできなかった。
- (3) この意味における「現在主義」という言葉の公刊された文書における用例は、わたしが発見できた限りでストッキングが最初であり、以後の用例も典拠を示す場合にはストッキングに拠っていることが多い。ということで、科学史においては、少なくとも公刊された文書で確認できる範囲では、ストッキン

グが「現在主義」と「ウィッグ史観」を同時に導入した、というのが正しい見方であるように思われる。ただしこれはもちろん用例の一つを発見するだけで覆る話である。1965年以前の用例をご存知の方があればご教示願いたい。

- (4) これは通常はヴァイン＝マチューズ仮説として知られる。フレッド・ヴァインとドラモンド・マチューズの共著論文で、海洋底が拡大しているなら海洋底の磁気異常には海嶺を中心とした左右対称が見られるはずだという予測が行われ、それが実際に確認されたことがプレート・テクトニクス説が受容される大きな決め手になった。しかし実は、ほぼ同時期にモーレーが同様の予測をし、論文を投稿していたにもかかわらず、査読を通らなかったため同時発見者となることができなかった。こうした事情があって、科学的な記述においては、ヴァイン＝マチューズ＝モーレー仮説という表現が使われることがある (c.f. Frankel 1982; LeGrand 1988)。
- (5) ブラッシュは注において自分が影響を受けた論考のリストを提示している (Brush 1995, 220, n18)。ウィッグ史観をめぐる論争の十全なサーベイを行う上ではこれら先行する議論とブラッシュの議論との比較検討が不可欠であるが、本稿ではそこまで手が及ばなかった。今後の研究の課題としたい。
- (6) prig は「小うるさい」という意味の言葉で、単に whig と音が似ているから選ばれている。
- (7) 一般向けの歴史記述のあり方としては、ウィッグ主義的な歴史記述を排除するというより、いろいろな立場からウィッグ主義的記述がなされて、それをあわせて読むことで全体像がつかめる、という考え方もありうる。しかし、論争の敗者は死に絶えてしまって、その視点から歴史を書いてくれる人がいなくなってしまうかもしれない（これがまさに勝利者史観の問題なわけである）。
- (8) 研究者養成のための教育を何段階かに分けて考え、最初は効率的なウィッグ史観的な教育からはじめ、徐々に現実に近い姿を教えるというモデルもありうるだろう。
- (9) さらに言えば、科学者が過去の科学者の過ちを指摘する過程で新しい発見があったり、過去の研究を換骨奪胎することで新しい研究につながったりするなど、「ウィッグ的」なアプローチがその分野そのものへの科学的な貢献になる場合もある。これはそもそも歴史記述を目指していないという意味では

- 「ウィッグ的」という形容詞を当てはめること自体が不適当な場面である。
- (10) 本稿は 2012 年 8 月 25 日に現代地球惑星科学史合宿での発表を文章化したものである。当日の議論には大いに刺激をうけ、いくつかの論点は本稿にも注などの形で取り入れられている。示唆をいただいた参加者、とりわけ熊澤峰夫氏と渡邊誠一郎氏には謝意を表したい。また、最終版の作成にあたっては査読者によるコメントにも大変助けられた。あわせて謝意を表する。

文献

- Agassi, J. (1963) *Towards an Historiography of Science*. Mouton.
- Allègre, C. (1988) *The Behavior of the Earth: Continental and Seafloor Mobility*. Harvard University Press.
- Brush, S.G. (1970) "History for scientists," *Isis* 61, 115-118.
- (1974) "Should the history of science be rated X?" *Science* 183, 1164-1172.
- (1995) "Scientists as Historians," *Osiris* 10, 215-231.
- Butterfield, H. (1931 [1950]) *The Whig Interpretation of History*. Bell and Sons.
- (1949 [1957]) *The Origins of Modern Science (1300-1800)* revised edition. Macmillan.
- Frankel, H. (1982) "The development, reception, and acceptance of the Vine-Matthews-Morley hypothesis," *Historical Studies in the Physical Sciences* 13, 1-39.
- Hull, D. (1979) "In defense of presentism," *History and Theory* 18, 1-15.
- Kuhn, T.S. (1967) "The turn to recent science," *Isis* 58, 409-419.
- LeGrand, (1988) *Drifting Continents and Shifting Theories*. Cambridge University Press.
- Leveson, D. (1991) "Whiggism and its sources in Allègre's *The Behavior of the Earth*," *Earth Science History* 10, 29-37.
- Oldroyd, D.R. (1980) "Sir Archibald Geikie (1835-1924), geologist, romantic aesthete, and historian of geology: the problem of whig historiography of science," *Annals of Science* 37, 441-462.
- Stocking Jr. G. (1965) "On the limits of 'presentism' and 'historicism' in the historiography of the behavioral sciences," *Journal of the History of the Behavioral Sciences* 1, 211-218.